

安心して潜れる漁場に

韓国で開催中の麗水万博で19日に開かれた日韓海女フォーラム「海女の集い」を、南伊勢町のエッセイストで、国内各地の漁村を訪ね歩き、数々の紀行文を出版している川口祐二さん(80)が取材した。両国共同でユネスコの無形文化遺産登録を目指す海女文化。帰国した川口さんは20日、毎日新聞社にフォーラムの様子と海女への思いをつづった文を寄せた。

日韓海女フォーラムルポ

19日の午後、麗水市で開かれている万博会場のカンファレンスホールに日韓の海女25人が集い、フォーラムが開かれた。国内からは石垣英一副場は熱気にあふれた。



川口祐二さん

知事や木下憲一・鳥羽副市長をはじめ、鳥羽商工会議所、海の博物館、研究者など計60人が出席。また韓国側も学生を中心に150人が集い、会場は熱気にあふれた。

石原義剛・海の博物館長(74)の基調講演のほか、海女漁業についての論考が発表され、文化遺産としてどう捉えるのが論じられた。

かわぐち・ゆうじ エッセイスト。旧南勢町役場で漁業振興に携わり、56歳で早期退職。以後、日本の漁村を訪ね歩き、その歴史と現在を記録する。海の博物館(鳥羽市)の職員、三重大客員教授を務める。近著に「島をたずねて三〇〇里」「漁村異聞」「島へ岸へ」(いずれもドメス出版)など。

圧巻だったのは、韓国・済州島の海女たちが披露した海女唄だった。歌に合わせて踊る女が持つ道具は、ひょうたんを浮きにし、木の枝を丸く輪にしたものに、粗い編み目の網をつけて作ったスカリ(取った海産物を入れる袋)であり、10人の素朴な踊りは、

世界遺産登録目指し

強く参加者の心に響いた。

続く「相違音頭」の手踊りで会場は盛り上がり、それに加え、東日本大震災による磯の沈下で、まだ漁場が回復していない宮城県石巻市の網地島の海女が、この苦難に耐えて、これからも海女として生きることを力強く語った。このほか、今もウエットスーツを着ないで漁をする長崎県壱岐島の海女たちが「吉州おけさ」を歌って花を添えた。

この日初めて会ったばかりの人たちが、あたたかも10年の知己のような和やかさを盛り上げた。両国が仲良く手を組んで、海女文化をユネスコ無形文化遺産に登録できるよう頑張ろう、という松田音寿・鳥羽商議所会頭の呼びかけに、全員が唱和して幕を閉じた。

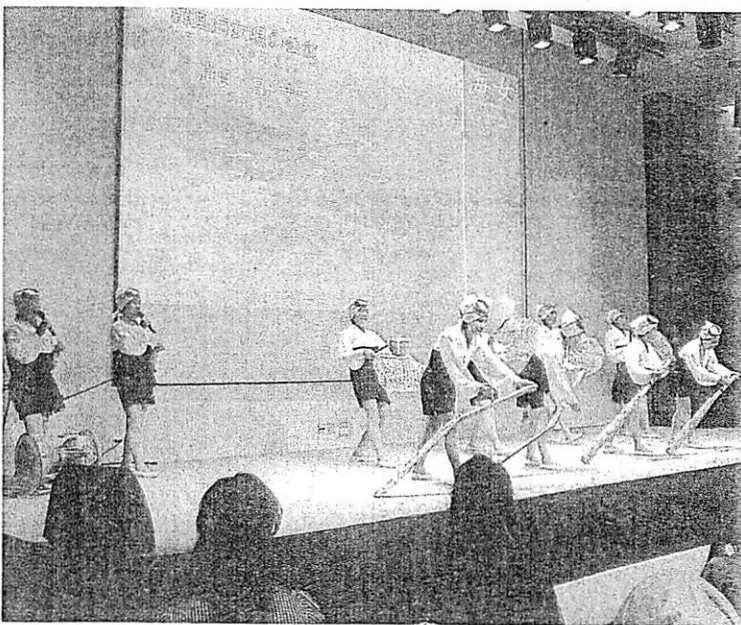
海女漁業は古くは万葉集にも詠まれるなど長い歴史があり、両国にしか見られない貴重な文化である。今回の催しは、ユネスコ登録に向けて両国が同じスタートラインに立

ったという意義を持つ。

いま、世界に約7000人の海女がいる。日本2000人、韓国5000人と見てよいが、10年前に比べれば日本は6分の1の減少である。我々は、海女の激減に心を致すべきだ。沿岸漁業の環境悪化による磯根資源の枯渇、つまり、磯にアラメが育たず、ア

ラメが取れない、サザエが少くないという現実から目をそらしてはならない。潜いても、とるものがなくては仕事にならん」という海女の嘆きに耳を貸そう。済州島も磯の汚れが目立ち、アラメの水揚げは減った、と海女は訴えている。

海はひと続きた。海女が安心して潜ける漁場の復興こそが急務である。海女文化をユネスコ無形文化遺産へと願うならば、この視点を見落と



会場で披露された韓国の海女唄―泉提供

共助の時代をどう築くか

「着実と敏速と」

三重大学客員教授・エッセイスト

川口 祐二

今年の秋、11月4日のことである。いささか旧聞に属するが、私は岩手県山田町にお住まいの沼崎喜一さんに会った。あの大災害を被った町の町長として、12年7月まで町の復興に陣頭指揮を執った人である。

三重県主催の津波防災シンポジウムが、南伊勢町五ヶ所浦の町民文化会館であり、「生かされて明日へ」東日本大震災から学んだこと」と題する講演のために来町された。

「とにかく逃げることです。高い所へ逃げる。最悪の場合を考えて行動することです。津波が来たら、何はさておいても、一人ひとりが自分で逃げることを考えることが大切です。私の町に船越という地区があります。この堤防は高さ6.6mあります。それだけの高さでも今回の津波に耐えられなかったのです。今ある施設を過信してはいけないのです。」

沼崎さんの講演の一部である。高台に避難したが、忘れ物を取りに戻って犠牲になった人も大勢いた、とも話されていた。

1944年(昭和19年)12月の東南海地震による津波では、当時の北牟婁郡錦町(現在の度会郡大紀町錦)で、同じようなことがあった。戦争中のことで、米を取りに戻って流された人が何人かいた。あれから優に68年以上もたっているが、今まだ見

つからない人がいる。私も、68年前の東南海地震を体験している。小学校(当時は国民学校)6年生であった。冬の日の午後、ぐらぐらと大きな揺れが来た。全員が我先にと運動場へ出た。わら草履の者が早く、運動靴の何人かはひと足遅れた。運動場には中央に大きな亀裂があった。担任の教師は師範学校を出たての若い青年であったが、津波が来るかもわからない、高い所へ登ろう、と全員に声を掛け、先頭に立つと細い道を駆け上がった。三本松といわれる城跡で私たちは津波を見たのである。

目の前の葛島が、潮が引いてぐんぐんすそひろがりに大きくなっていくのを見た。津波は引き潮のあとから来た。目の下にアジを釣る小舟があった。舟は波に押されて湾奥の方向に流れたかと思うと、帰る波とともに沖へ押し出された。そんなことを三度繰り返したと記憶する。五ヶ所湾ではいくつかの湾奥の集落が波につかかった。チリ地震津波もあった。だから津波は他人事でないのである。私の住む五ヶ所浦の中央に細い道が、坂道のまま保育園に通っている。保育園は地区の避難場所である。この道を拡幅して、一旦緩急の際のために備えよ、という声に住民から出てきた。今まで防災訓練に参加しなかつた人たちが、東日本大震災の後に行事に加わるようになって、この道では駄目だと体感したのである。安全安心という暮らしを望むならば、行政と住民とが話し合い、結論を出すことで、それは実現される。金がないからではすまされない。着実にそして敏速にとという姿勢を行政に求めなければならぬ。一本の道が、本当の地方自治の精神を育てること

につながる。災害は地震津波だけではない。台風がある。熊野灘沿岸は台風銀座だといわれる。伊勢湾台風という有史以来、初めてといつていい災害があった。近年では2011年9月3日から4日にかけての台風12号が、熊野地方に大災害をもたらしたことは記憶に新しい。沖をゆく船舶の遭難も多い。

昭和10年8月29日、中国船華成輪船が当時の宿田曾村の田曾三崎に座礁するという遭難事故があった。船は4,249トンの貨物船で、横浜から上海へ帰る途中台風に遭い、三つ島という岩礁に乗りあげた。村では半鐘を乱打し、人を集め村民300人の敏速な救助活動で54人の乗組員全員を助けた。当時の朝日新聞には、「嵐の中に宿田曾村民の活躍美しい国際愛」※という見出しが躍っている。

東日本大震災のとき、宿田曾地区の漁民は素早い行動をとった。遠洋漁業船員組合が中心となって、義援金と救援物資を集めた。一日で10万円が集まった。それらは海を渡った船は地元で巻き網船であった。船にはボートが積載されており、幸い三陸の漁師も乗っていた。途中、清水港で缶詰を積み足した。南伊勢町の漁民の真心はまず宮城県の大川で、そして、岩手県の久慈の港で被災者の手に届いた。


敗戦後間もない昭和22年9月13日夜中に、この村で大火災があり、56戸が全焼した。物資欠乏の時代いち早く救助の手をさしのべてくれたのが、気仙沼や女川といった三陸の漁港の人びとであった。村人たちは、あのとときの恩を忘れずにいたのである。

プロフィール

三重大学客員教授・エッセイスト

かわくち ゆうじ
川口 祐二

1932年 三重県生まれ。
1960年から1989年まで
南勢町(現在の南伊勢町)
役場勤務。
その後、全国の漁村を歩いて聞き書きを続け、その間『甞れ、いのちの海』など27冊の著書を出し、現在に至る。
1990年から2002年まで三重大学非常勤講師、2008年10月から客員教授として、海女研究会に所属。
近著に『島へ、岸へ』がある。



※1935年8月30日「朝日新聞(大阪)」13面三重版

昭和10年の中国船員の救助といい、今回の大震災の被災地への見舞いと、着実かつ敏速な行動があった。沼崎さんは講演の中で、復興には早くとも10年はかかるだろう、と言われた。気仙沼に住む私の友人から手紙では、30年かかって元通りになるだろうかとあった。他所へ去った人たちをどう呼びもどすのか、道は遠い。

東京にいる選良たちの何人が、今、東北の被災地の人びとに思いを馳せているだろうか。政争に明け暮れるだけの毎日、(その)には、steady(着実さ)も speedy(敏速さ)のひとかけらもない。あれから早くも二年になる。一部の政治家は、小異を捨てて何とやら、などとうそぶくが、被災地の人びとの暮らしを立て直すことが、小異であつてはならない。我々の声が小さすぎるのである。

全国「海女」数の変遷一覧表

県名	①1931	②1934	③1938	④1956	⑤1965	⑥1975	⑦1978	⑧2010
北海道	-	-	-	-	4	-	2	1
青森	-	-	-	-	0	30	-	-
岩手	-	180	-	-	256	315	246	85
宮城	20	-	-	230	40	50	40	17
福島	-	-	-	-	0	0	-	0
秋田	30	-	-	-	0	2	-	0
山形	-	25	-	-	-	-	-	0
新潟	-	683	389	1391	50	150	140	0
茨城	656	-	-	-	5	0	3	0
千葉	2143	752	878	3243	1403	1944	1161	158
東京	482	5	6	232	266	88	114	0
神奈川	66	-	-	30	16	0	-	0
静岡県	684	1110	471	783	2157	1099	1059	153+
富山	10	37	35	115	50	-	30	0
石川	167	365	370	752	99	260	176	197
福井	2328	1960	1229	2053	212	519	183	76+
愛知	53	90	-	72	78	-	64	0
三重	3548	3744	5366	7213	3500	4183	3167	973
和歌山	702	181	-	511	643	187	345	5
京都	-	70	59	50	0	111	-	0
鳥取	-	26	30	90	72	-	45	15
島根	-	-	-	-	-	73	-	0
山口	264	183	150	125	355	291	396	127+
徳島	221	255	110	219	270	198	273	86
高知	30	75	0	200	211	2	122	0
愛媛	-	-	-	-	10	20	-	-
福岡	37	125	137	-	85	193	126	115
佐賀	-	10	30	-	122	26	135	4
大分	63	65	60	25	73	53	245	15+
鹿児島	153	-	-	25	403	40	251	3+
熊本	15	(62)	-	-	40	-	77	20+
長崎	754	187	-	252	622	775	682	124+
合計	12426	10128	9320	17611	11042	10609	9134	2174+
沖縄	487							
計	12913							

①千葉県社会課調査・昭和6年(22県海女あり)

②西武夫調査(22県に海女あり)

③水産局漁政課・徳久三種調査(15県海女あり)

・この数字は「海女の分布の生態学的考察」香原志勢から引用したが、額田年の④にも同じ引用があり、合計が9570となっている。その数字のちがいは、香原が静岡471、山口150としているのを額田は静岡741、山口130としていることによる。

④東邦大学・額田年調査(20県海女あり)

⑤⑦の水産庁企画課に昭和40年頃として記されている数、宮崎15を足すと合計数字になる。(26県に海女あり)

⑥大喜多甫文調査(23県に海女あり)

⑦水産庁企画課調査(24県に海女あり)

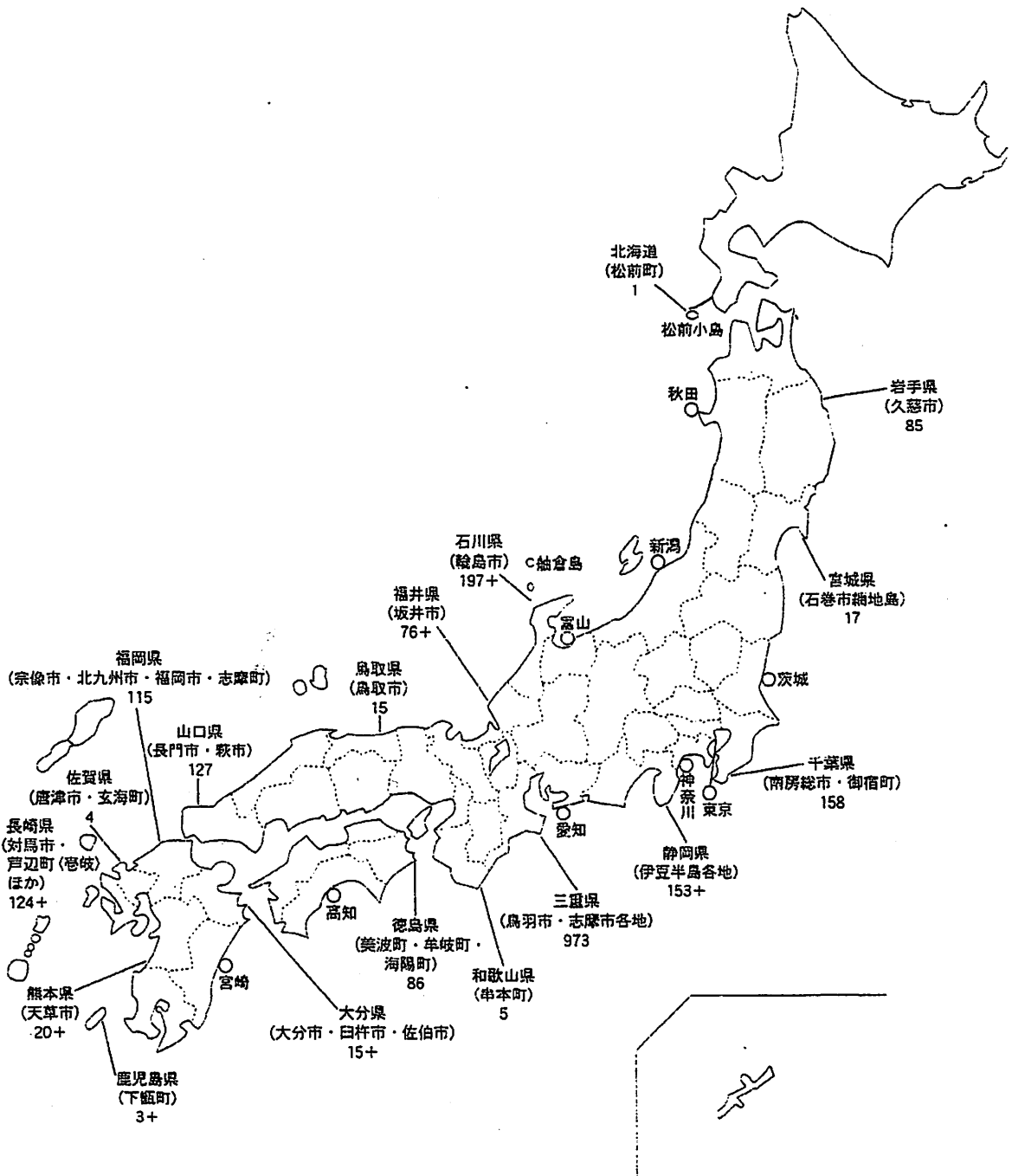
⑧海の博物館調査(18県に海女あり)

☆-印しは、調査対象県に記載なしの熊本県

()印しは男女の総計で記載されている。

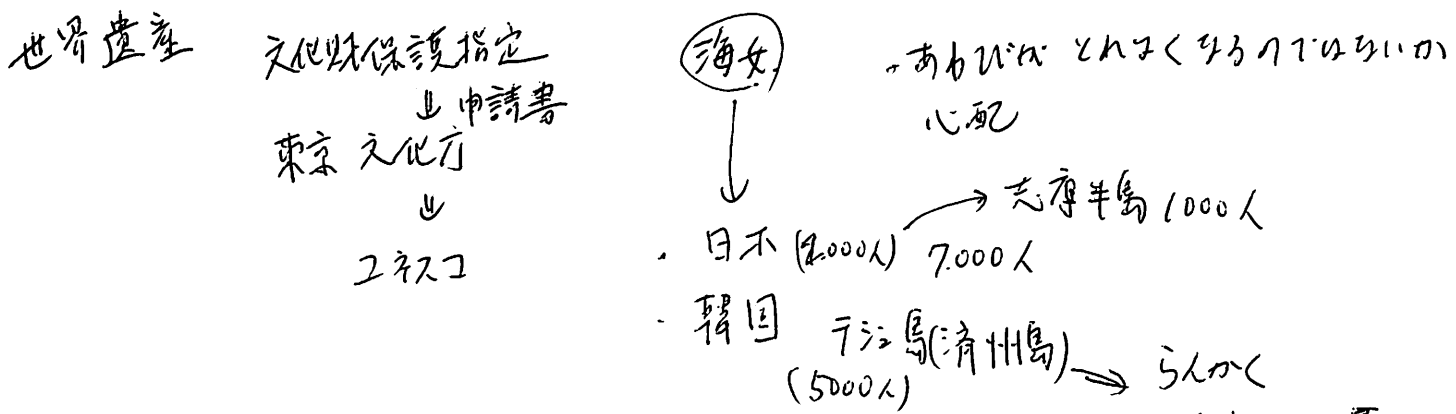
平成22 (2010) 年海女分布県図

数字は海女数 ○は昭和53 (1978) 年には海女のいた県



演題 : 蘇れ命の海・絆の大切さを課たる
講師 : 川口 祐二 (三重大学特任教授、NHK ふるさと通信員)
場所 : 代々木高等学校ホール

声浪に感化されてきたら大変なことになっていた (西尾)



漁業保護のため フォックスを着た (長崎 壱岐)

主権のふく元する位の気持ちで取り組む

4/1~ NHK おまろん
速ラ 岩手県、
朝代 (久慈市)
北三陸

上海女
(HAIYAMA) あわびをとりこそ
価値がある

海女サミット 鳥羽・和泉

(アワビ) 養殖
工サ代まで
採算のとれず

あま 日本 = 相違が一歩多い
かまかみい

漁業の合併
漁民の生活と考えるための
職員の保全

【次回の講座案内】

2月21日(木) 10:00~ 代々木高校
テーマ : 元気プロジェクトが動かす明日の志摩 (1年間のまとめの方向で討論会)
コーディネーター : 一色 真司 (代々木高校長、賢島大学代表)

【お知らせ】

来年度も開設予定で、現在志摩市協働提案事業へ申請(岡田財団は3年限度で最終年度)
・開設にあたり希望はありませんか。申し出てください。

嫁に行ったら 同着に行け